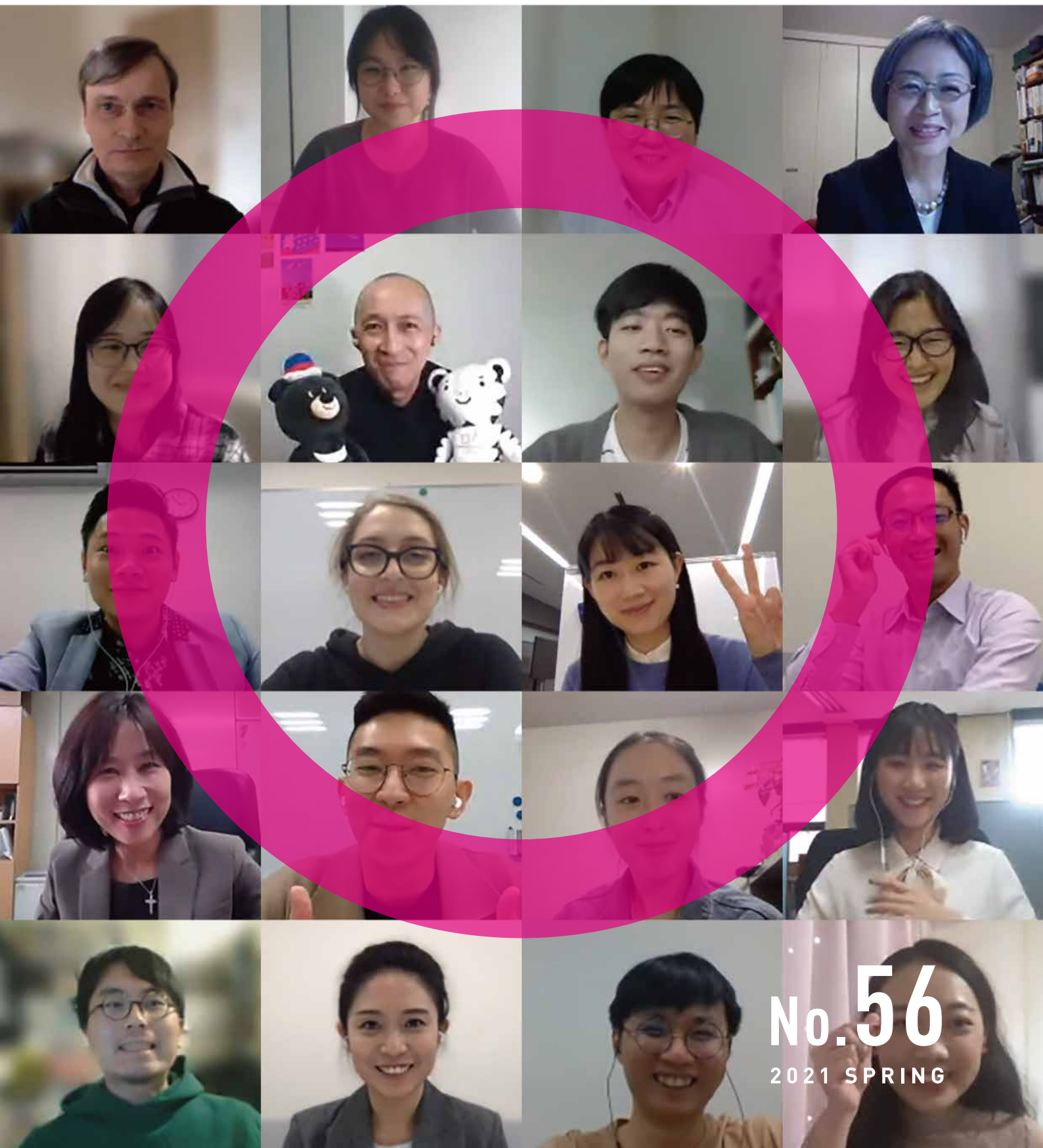


GAKKAN

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo



No. 56
2021 SPRING

ここからまさに学環・学府の出番

——新しい研究領域を育てるための種蒔きが課題に——山内祐平 教授

2021年4月に新学環長・学府長へ就任された山内先生にお話を伺いました。

パンデミックとご専門の学習環境デザインについて、また21年目に入突する学環・学府の今後の課題と目標について語っていただきました。



——ご研究について教えてください。

情報通信技術を使って新しい学習環境をデザインする研究をしています。例えば今まさにコロナ禍でオンライン学習が普通になっていますが、オンラインだけでも深い学習ができるようにするためにはどうしたらいいか、オンライン学習と対面学習をどう組み合わせれば学習の成果が上がるのか、そういう研究もしています。

——2020年、コロナ禍で全世界が強制的に学習環境を変えさせられました。

今回コロナで起こったのは、学びを止めないことを最優先に、対面でやっていたことをそのままオンラインに置き換えることでした。今は「対面の方がいいけど今はできないから仕方なくオンラインを使っている」という状態だと思いますが、本質的には、対面でやった方がいいところもあれば、オンラインでやった方がいいところもあるし、組み合わせると強力な学習環境ができるかもしれない。はじまりは強制でしたが、情報通信技術を使えばこういうことができるということが分かったという意味では歴史的な事件だったと思います。これからは対面だけの時よりよい学習ができるようにみんなが頑張っていく時代になると思います。

——オンライン授業以外にも、学生にはさまざまに影響がありました。

特に修士1年生にはつらい1年だったと思います。オンラインでしかゼミができず、研究室にもなかなか来れなくて、同級生との関係が上手につくれなかったり、研究室の中で自然にできていたノウハウの伝達が難しかったり。今回痛感したのは、研究をすることがいかにコミュニティに根差した行為であって、人と人のつながりがなくなるとうまくいかないものかということです。もう一つ言うとしたら空間が持つ力。同じ場を共有するということが本当は幸せなことだったんだと今回みんな実感したでしょう。

その一方で、厳しい状況でもたくましく生き、前向きに学ぼうとする大学院生の姿にも勇気づけられました。この努力は10年後、20年後に結実し、新しい領域が開拓されていくのではないかと期待しています。

——山内先生といえば学環コモンズをつくられた方ですね。

学環コモンズは24時間365日、居場所としていつでも来て友人や教員と話せるスペースとして大切に守ってきました。でも2020年4月からの緊急事態宣言の

時は完全にキャンパスがクローズされたので使用停止にせざるを得なかった。それは学環コモンズができて以来初めてのことで、私としても内心忸怩たるものがありました。今は感染対策をした上で使っていただけますので、ぜひコモンズを活用してオンラインだけではできないような深いつながりを作っていただけたらうれしいです。

——2020年に学環・学府は20周年を迎えました。21年目からの学環長として、どのような課題や目標がありますか。

20周年の年である昨年、情報学環は将来計画を立てました。今後20年にわたって学環・学府をどう発展させていくかという計画です。

学環・学府は、情報社会と人間に関する研究と教育を20年間進めてきて、大きな実績をあげてきました。研究領域でいうと、情報と社会基盤・戦略、情報と倫理・文化、情報とアート・デザイン、情報と防災コミュニケーションという4本の柱を立ち上げてきたわけです。

今後20年間にわたっては、この柱をもっと増やしていかなければいけません。いま育った4本の木はきちんとコミットして育てていきつつ、また新しい種を植えて新しい木を育てていく。学環長の任期3年で私がやることは、色々な新しいプロジェクトの種蒔きをすることだと思っています。

——学習環境デザインの専門家として「学習環境をこうしたら論文が書けるよ」と一言でアドバイスをいただけるならば？

論文が書ける人と議論しながら、論文を書く方法を学ぶということですね、一言で言うと。論文は一人で書けるようにはならない。コミュニティの中でどうやって書いたらいいかということを知り取る、そのためにあるのがまさにゼミですね。一番重要なのはリサーチクエストです。問題をどう設定するかがある程度わかれば論文は半分できたようなものなので。論文が書ける人はどういう目で先行研究を見て、どうやって問題を見つけていくのか。こういうことをコミュニティとして共有することが、わざわざ集まる意味だと思います。論文を書くというのは、社会的な営みなんですよ。

——学府の学生にメッセージをお願いします。

コロナによって、「情報」が未来社会の基盤なんだということを全世界の人々が理解したと思います。ここから先はまさに学環・学府の出番。いまDXが流行り言葉になっていますが、よりよい人と社会のつながりのために情報をどう使うかというのは我々の専門ですし、それがこれほど求められる時代は今までなかった。まさにこれからが正念場だと思っています。

情報社会を複眼的に見られる人はこれから活躍が期待される場所。ぜひここで学びを深め、社会が求めている情報環境を創造するためのステップにしてください。コロナ禍でやりにくいところもあるでしょうが、自分と専門が違う人たちとのネットワークを作って、卒業後の活躍の礎にいただければと思います。

ホームカミングデー 「ディスタンス時代における『学際』」

学環・学府20周年の節目となるホームカミングデー・オンラインイベントが、2020年10月17日に開催されました。ゲストとして落合陽一さん（筑波大学准教授、2015年学際情報学府博士課程修了）と李怡然さん（医科学研究所武藤研究室特任研究員）をお招きし、司会役の渡邊英徳教授と共にパネルディスカッションを実施しました。COVID-19は、「学際」を掲げる学環・学府の研究・授業の運営にどのような影響をもたらし、我々はこの後も続いていくはずのその変化にどう向き合っていくべきか。そのような問題提起の下、当夜は、パネリスト3名のプレゼンテーションののち、来たるべき「ディスタンス時代における『学際』」のあり方を、メディアアート、医学、情報デザインなど、多角的な議論を通して探りました。オンライン参加者も約250名となり、盛況となりました。

記事：渡邊英徳(教授)



2020日韓台シンポジウム 「Media, Communications, and Information in an Era of Global Crisis」

東京大学大学院情報学環・学際情報学府、ソウル大学校社会科学大学言論情報学科、国立政治大学伝播学院が共催する日韓台共同シンポジウムが2020年10月30日に開かれました。今年は東大が韓国と台湾の教員・学生を東京に招いて開催する予定でしたが、COVID-19の感染拡大の影響を受け、半日間のオンラインシンポジウムとして開催されました。「Media, Communications, and Information in an Era of Global Crisis」というタイトルを掲げた今年のシンポジウムは、前半には各大学の学生参加者による研究発表の場を、後半には3か国におけるCOVID-19の影響及び各国の対応などを社会、文化、政治、そしてメディアといった様々な側面から議論する場を設けました。各大学から教員と学生を合わせて34名が参加し、オンラインによる制限をもとめず熱い議論をかわす時間になりました。

記事：イミンジュ(特任助教)



東京大学制作展2020 「弛む」

2020年11月13日～16日、東京大学制作展2020「弛む」が開催されました。本制作展は、学際情報学府の授業の一環で、コンセプト設定・展示物制作・運営を学生中心で行う展示会として、毎年7月と11月の2回開催しています。今年制作展はCOVID-19の感染拡大状況を考慮し、例年と異なるオンラインでの開催となりました。

「弛む(たゆむ)」というコンセプトのもとで学府内外の幅広い所属の学生が運営に参加し、オンラインの特性を生かした作品やオフラインとオンラインを融合させた作品など、この状況だからこそ生み出せる新しい作品体験を提供しました。SNSや各種メディアを通し情報発信をし、全世界から約1,800名の方にご来場いただき、多くの方に本展覧会をお楽しみいただきました。

記事：林 裕嵩(修士課程、東京大学制作展プロデューサー)



poimo: 持ち運びできるふくらむ乗り物

算研究室では、情報理工学系研究科・mercari R4D・工学系研究科などのメンバーとともに、poimoという乗り物を開発しています。poimoは、パーソナル・モビリティとソフト・ロボティクスの技術を組み合わせた新しい電動モビリティです。最大の特徴は、車体の大部分が風船のようなインフレーター(空気圧)構造になっていることです。そのため、人が持ち運べるくらい軽く、やわらかく安全で、必要に応じて膨らませたり畳んだりすることができます。また、ユーザーの体型や用途に合わせた車体を設計・製造することも可能です。これらの特徴を活かして、例えば本郷三丁目駅から本郷キャンパスなど、公共交通機関と目的地の間をシームレスにつなぎ、ファーストマイル/ラストマイルを担うことを目的として、日々研究開発が続けられています。

記事：鳴海紘也(助教)



2019-2020年度 「業務改革総長賞」特別賞受賞

情報学環・学際情報学府は、2019-2020年度業務改革総長賞の特別賞(表彰課題:研究者情報管理システムの実装)を受賞しました。業務改革総長賞は、東京大学業務改革推進室が毎年全教職員からさまざまな業務改革の成果を募集し、その中でもっとも優れている取り組みを表彰するものです。今回、情報学環・学際情報学府は大学本部が推薦した課題を積極的に導入し、業務改善効果が得られた組織のひとつとして表彰されました。2020年12月16日(水)に開催された表彰式は、新型コロナウイルス感染症対策のため安田講堂に受賞者とその関係者だけが出席し、その様子をオンラインで同時配信する形で行われました。情報学環からは中尾彰宏教授が出席され、五神真総長ならびに里見朋香理事(業務改革担当)から表彰状と副賞を受賞しました。

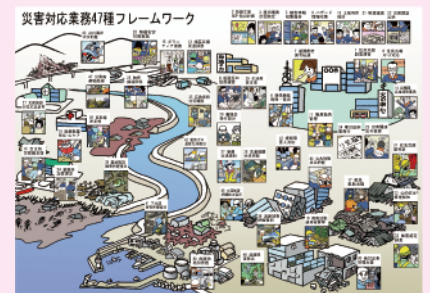
記事:神谷説子(特任助教)



コロナ禍での災害対応の研究

コロナ禍での自然災害の対応について研究を進めています。感染症拡大下での災害対応の業務の中で特にこれまで以上に重要となった研究テーマは、1)災害対応業務の標準化とシステム化、2)リモートでの災害現場の迅速な広域的被害状況の把握、3)住民が密集し感染症が拡大するリスクの高い避難所運営のあり方の検討です。1)については、各業務をフローチャートの形で流れが分かるようデータベース化した災害対応工程管理システムBOSS(Business Operation Support System)を開発し、自治体や福祉施設などに導入しています。2)については、無人航空機などによる空撮画像を用いた自然災害後の建物被害の検出と被害情報の共有手法の構築を行っています。3)については、避難生活に対する考え方の全国市民調査を実施し、また川崎市との共同で、BOSSを使った実証実験を行いました。今後自治体で実現可能な対策の検討を深めていきます。

記事:沼田宗純(准教授)



東日本大震災とデジタルアーカイブ

今年は東日本大震災から10年です。このたび被災者が歩んできた生活再建に至る物語を伝える可視化コンテンツ「忘れない:震災遺族10年の軌跡」を岩手日報社と共同で制作・公開しました。ご遺族へのインタビュー内容をもとに、被災後10年間の移動とできごと、住居種別・転居回数をデジタルマップ上で可視化した「生活再建マップ」、インタビュー内容を機械学習で分析、被災後10年間の住居種別・転居回数にまつわる困りごと・心理状態の変化などを可視化する「言語分析」の2つで構成されています。過去の災いの記録と記憶を再表現し、未来につないでいくデジタルアーカイブを、次なる災害に備えるためにご活用いただければ幸いです。学府で学び、研究するみなさんにとって「いま、自分たちに何ができるか」を考えるきっかけになればとも思います。

記事:渡邊英徳(教授)



学生向けハッカソン 「あそびの未来ファクトリー2021」

2021年2月17日から3月3日にかけての2週間、第3回目となる東大生を対象にしたハッカソン「あそびの未来ファクトリー2021」を開催しました。COVID-19の影響によって全日程オンラインで実施した今回のハッカソンで、参加者たちはチームを組み、「あそび」とはそもそも何なのかについて考えを深めることと、「未来のあそび」を考案することに取り組みました。デザイナーやエンジニアとして活躍する方々をアドバイザーとして招き、学生のアイデア出しや技術のサポートをしてもらいました。中間発表会を経て最終成果発表会では、各チームが考案したあそびの紹介ビデオの上映とプレゼンが行われました。どのチームもオンライン上で楽しめるあそびを考案していました。成果物に対しては審査が行われ、2つのチームが受賞。受賞チームに限らず、どのチームにも面白い観点や将来性が感じられました。

記事:阪口紗季(特任研究員)



令和2年度大学院学際情報学府 秋季学位記授与式

2020年9月18日、学際情報学府の秋季学位記授与式が行われました。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、一部の修了者と教員だけが福武ホールラーニングシアターに集まり、その様子がオンラインで生配信される形式となりました。修士課程修了者16名と博士課程修了者4名に、越塚学府長より祝辞が贈られました。



令和2年度 秋季入学式・ガイダンス

2020年9月24日、学際情報学府の秋季入学式および入学ガイダンスがオンラインにて行われました。修士課程入学者18人と博士課程入学者6人が出席し、越塚学府長より祝辞が贈られました。ガイダンスは、動画と資料を用いて実施されました。

記事：金 佳榮(特任研究員)

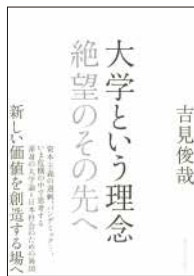
合格発表

2021年2月16日、令和3年度修士・博士課程冬季入試(2021年4月入学)の合格発表がありました。出願者数は修士課程120名、博士課程37名でした。最終合格者数は、表の通りです。

| 冬季入試・修士課程合格者数 | |
|---------------|-----|
| 社会情報学コース | 7名 |
| 文化・人間情報学コース | 8名 |
| 先端表現情報学コース | 8名 |
| 総合分析情報学コース | 10名 |
| 合計 | 33名 |

| 冬季入試・博士課程合格者数 | |
|---------------|-----|
| 社会情報学コース | 6名 |
| 文化・人間情報学コース | 5名 |
| 先端表現情報学コース | 10名 |
| 総合分析情報学コース | 3名 |
| 合計 | 24名 |

BOOKS



大学という理念 絶望のその先へ

吉見俊哉 著
発行年月：2020年9月 出版社：東京大学出版会

私は東大ですでに半世紀近くを過ごしている。その間、徐々に浮上した疑問がある。日本に800校近くもある大学は、実は大学＝ユニバーシティではなかったのではないか。大学が大学でない！この絶望を考え抜くため、本書は大学とはいかなる理念的な存在なのか、それはいかに危機を迎え、転倒し、終焉しつつあるのかを論じている。(教授：吉見俊哉)



科学コミュニケーション論 新装版

藤垣裕子／廣野喜幸 編
発行年月：2020年12月 出版社：東京大学出版会

本書出版までの科学コミュニケーションの書籍は、ノウハウ本か、各自の経験を洗練した個別の理論しかありませんでした。藤垣裕子先生と研究会を組織し、『公衆の科学理解(Public Understanding of Science)』誌の2008年までの全論文を読破し、科学コミュニケーション論の体系化を初めて試みたのが本書になります。続編も執筆が進んでいるところです。(教授：廣野喜幸)



科学とはなにか 新しい科学論、いま必要な三つの視点

佐倉 統 著
発行年月：2020年12月 出版社：講談社

原発事故や地震津波災害や新型コロナ感染症などの危機が立て続けに起こっています。科学技術の成果はこういった困難を切り抜ける強力な武器にもなる反面、使いようによってはかえって事態を悪化させることにもなります。どういった「使い方」が良いのかを、「科学技術は誰のものなのか？」という問いを通して、考えてみました。(教授：佐倉 統)



大航海時代の日本人奴隷 アジア・新大陸・ヨーロッパ 増補新版

ルシオ・デ・ソウザ／岡 美穂子 著
発行年月：2021年1月 出版社：中央公論新社

「奴隷」と聞くと一般に思い浮かべるのは、アメリカのプランテーションで働かされるアフリカ系の人びとだと思えますが、この本では日本人をはじめ、主にアジア人奴隷を扱っています。16世紀大航海時代の文献に散見される彼等の足跡を辿っています。想像以上に豊かな旅路です。(准教授：岡 美穂子)



ワークショップデザイン論 創ることで学ぶ 第2版

山内祐平／森 玲奈／安齋勇樹 著
発行年月：2021年1月 出版社：慶應義塾大学出版会

「ワークショップデザイン論」は、情報学環・学際情報学府で行われてきたワークショップ研究についてまとめた書籍で、第1版は2013年に出版されました。ワークショップに関する理論・実践・評価をとりあげており、実践現場からも好評であるため、第2版が出版されることになりました。最新の事例も掲載されています。(教授：山内祐平)



妄想する頭 思考する手 想像を超えるアイデアのつくり方

暦本純一 著
発行年月：2021年1月 出版社：祥伝社

「新しいことを生み出す」には、思考の制約を意識して外したり、漠然とした妄想を言語化しながら具体化していくなどの、いくつかのコツが必要だ。試行錯誤を通じて手で考えることにより、さらに新しい発想が生み出されることもある。本書では、そういった発想や思考の手法を、筆者の経験を踏まえながら具体的に紹介する。(教授：暦本純一)

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>

【あとがき】 激動の2020年、みなさまのように過ごされましたでしょうか。今までの生活環境や価値観がこれほどまでに変化した年は、人生約半世紀生きてきて初めてのことでした。学環のニュースレターチームでも、みなさんの学生・研究生活の変化を可能な限り汲み取ろうとアンケートを実施いたしました。意外な結果も随所にあり、今後のことを考えるのに大変役立つ内容になっています。環境の変化になじめず、研究がうまくいかないところも多々あると思います。しかし苦難や中断、停滞を経て、より成熟していくものも必ずあります。苦しくても日々の新しい発見を楽しんでいれば、いつか知らないうちに違うステージに立っているはずです。(岡 美穂子)

【お詫び】 GAKKAN54号の4ページ下「ホームカミングデーのお知らせ」内の登壇者欄に落合陽一さんが二度記されておりました。重ねてお詫び申し上げます。

GAKKAN 56 2021.4
東京大学大学院 情報学環・学際情報学府
Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

編集委員: 安ウンビョル、岡 美穂子、神谷説子、金 佳榮、デイビット・ビュースト、福嶋政期
デザイン: マルヤマデザイン(丸山智也、野中優衣)